

社会学の対象と方法

——カール・マンハイムの思想を中心として——

石 瀬 秀 治

序

社会学は、周知のように、十九世紀の中葉頃コントによって成立して以来、それは今日に至るまで幾多の実質的業績をおさめ、今日では社会科学の世界において揺ぎない一市民たるの地位を確立しているのであるが、しかしそれにも拘らず社会学の対象と方法という問題に関しては厳密にはなお現在いろいろの異論がみられるのである。即ち、極めて大まかにみても、社会学は当初コントやスベンサーなどにおいては社会現象の全体的総合的認識を目指す百科全書的歴史哲学的な、いわゆる「総合社会学」として主張せられたのであるが、この総合社会学は社会学を諸他の特殊的社会科学と並んだ、一つの固有の研究対象をもつ特殊的社会科学として確立することが出来ず、そのために大体一八九〇年頃からそれは社会学の内部からも又外部からも厳しい批判をうけるに至ったのである。そしてそうした素朴な総合社会学の立場を根本的に吟味批判したのがジンメルであり、ジンメルは人間の社会関係の諸形式を固有の研究対象とする、いわゆる「形式社会学」を主張し、そうすることによって社会学を一つの特殊的社会科学として確立することに一応成功したのであるが、しかしこの形式社会学も社会学の研究対象を単に社会関係の形式のみに制限し、しかもそうした社会関係の形式を取扱う際に、例えばその実際上の諸研究においてはそうした社会関係の形式を社会の文化的諸内容との連関において取扱っていることがあるにはしても、原理的には現実の文化的諸内容を捨象し、歴史的な時間や空間を遊離せる地平において取扱わんとしたために、大体一九二〇年頃から形式社会学の非現実性や非歴史性や更には抽象

性という非難を生むに至ったのである。ところでそうした形式社会学の批判的止揚を直接に企図せる代表的なものとしては、例えばアルフレット・ウェーバーの「文化社会学」あるいは「歴史社会学」、カール・マンハイムの「文化社会学」、フライヤーの「現実科学としての社会学」、オグバーンらの「文化社会学」などを挙げることが出来るのであり、その後も今日に至るまでいろいろの人々によって大体それと類似の主張が多くなされているのであるが、それらは皆一様に社会学に形式社会学以上の研究対象や課題を与えることにより社会学に何らかの形において現実性や歴史性や更には具体性を盛りこまんと試みているのである。従って今日社会学の世界においては、成程コント流の素朴な総合社会学の立場は殆んどみられないにしても、なお依然として総合社会学に近いような立場があるとともに、又形式社会学の立場も可成り大きな支配力をもっており、更には文化社会学などと呼ばれるものに類する新しい立場も強く主張されており、それらの間に厳密には矢張り種々の議論が残されているというのが社会学の現状なのである。それで、社会学のそうした現状に顧みて、私はこの小論では特にカール・マンハイムの社会学論を引用しながら社会学の対象と方法の問題を考えてみようと思うのである。曾って私は「マックス・ウェーバーの理解社会学に関する若干の批判」と題する拙論においてそうした問題に簡単にふれたこともあるのであるが、ここではそれを一層詳しく取扱うことにしたいと思う。もっともこの問題に関してはマンハイムの外にも、又彼の後にもいろいろ注目すべき人や文献があるわけであるが、ここではとりあえずマンハイムの立場を検討しながらこの問題に対する私見を述べることにしよう。しかし又この問題については私

自身未だ決しかねている点もあるので、私見はなお未熟なものたらざるを得ないのであるが、他日又機会を得ていろいろ新しい文献にも関説し、又それらによって未熟な点を修正してゆくことにしたいと思う。

(1) 「富大経済論集」第二巻、第一号

一

先ずマンハイムの社会学論を検討することから始めることにしよう。ところで、今便宜上マンハイムの社会学論の論郭を簡単に先取していえば、彼は社会学の研究部門を、

- (一) 「特殊科学としての社会学」 *Soziologie als Spezialwissenschaft* あるいは「一般社会学」 *Allgemeine Soziologie* あるいは「理論社会学」 *die theoretische Soziologie* という部門と、
 (二) 「特殊諸科学に関する社会学」 *Soziologie der einzelnen Disziplinen* (od. *Einzeldisziplinen*) あるいは「連字符社会学」 *Bindestrichsoziologie* あるいは「特殊社会学」 *Spezialsoziologie* という部門と、
 (三) 「文化やその発展の社会的性格と文化の特殊諸領域の生成の全体的連関に関する理論としての社会学」 *Soziologie als Lehre vom gesellschaftlichen Charakter der Kultur und ihrer Entwicklung und vom Gesamtzusammenhang des Werdens der kulturellen Einzelgebiete* あるいは「文化社会学」 *Kultursociologie* あるいは「歴史社会学」 *die geschichtliche* (od. *historische*) *Soziologie* という部門と、

三分するのである。それ故次にこれ等の諸部門の内容を逐次検討してゆくことにしたいと思う。

(一) 先ず第一に「特殊科学としての社会学」あるいは「一般社会学」と呼ばれる部門は社会学のみならず社会諸科学一般の中核的部分をなすものであり、凡ゆる社会学的知識のシネ・クワ・ノンなのであるが、その研究対象

となるものは諸々の社会形態を成立せしめるところの社会化の過程 *Vergesellschaftungsprozesse* である。従って「一般社会学」は「社会化の条件と形式に関する理論」ということが出来るのであり、あるいは又「社会生活の一般的条件と形式に関する理論」とも呼ばれるのである。即ち、これはその研究目標を、専ら社会化を成立せしめるところの、諸々の力や形式に向けるのであり、従ってそれは、そうした社会化の作用と常に結びついているところの、諸々の精神的内実や文化的客観体や文化価値などは取扱わないのである。つまりその主題は諸々の文化内実を捨象した社会生活なのである。ところでこうした「一般社会学」は更に次の三つの部門に分たれるのである。

- (a) 第一にそれは、社会化を支配しているところの、例えば闘争、共同、社会化、競争、距離化というような、「過程」 *Prozesse* を凡て探求せねばならないのである。
 (b) 第二にそれは、こうした「過程」に基づいて結晶せしめられるところの、例えば協同関係、敵対関係、友誼関係、同僚関係、隣人関係というような、いろいろの「関係」 *Beziehungen* を記述せねばならないのである。

(c) 第三にそれは、例えば家族、社会層(階級、身分)、種々の生活圏、民族、国家等というような、複雑多様な「形象」 *Gebilde* をも描写しなければならぬのである。そうしてマンハイムは、上に述べたように、「一般社会学」を社会学の中核的部分と呼ぶのであるが、彼は更にそうした「一般社会学」におけるこの第三の部門を社会学の最も中核的部分とみているのである。従って社会学とは一体如何なる学問であるかという素人が今日極めてしばしば尋ねる質問に答えるには、それは家族、階級、民族、国家、人類社会というような現象やその形態やその形態の変遷や更にはその存在や生成の法則を取扱う科学であるといえはよいというのである。

このように、「一般社会学」は(a)「過程」と(b)「関係」と(c)「形象」

を取扱う三つの部門に分たれ、こうした三つの研究対象をもつ社会学の研究部門が又「特殊科学としての社会学」とも呼ばれるのである。

ところで、この「一般社会学」の研究方法には又(a)「非歴史的公理的方法」 unhistorisch-axiomatische Weise と (b) 「比較類型化的方法」 vergleichend typisierende Weise と (c) 「歴史的個別化的方法」 historisch-individualisierende Weise の三種類のものが区別され、それはこの三つの方法に従って研究されることが出来るのである。

(a) 第一の「非歴史的公理的方法」においては、社会一般を成立せしめるところの、社会化の諸々の言わば常数 *Konstanten*、あるいは公理論 *Axiomatik* が探求せられ、凡ての種々異なる社会的存在を超えてその不可欠な根本事実が求められるのであり、従ってそれだけ理論は抽象的となるのである。

(b) 第二の「比較類型化的方法」においては観察の重点は、第一の方法において除外視されたところの、歴史における同一種類の現象の可変性に置かれる。というのは、特定の社会現象における不変的な常数という要素はそれの諸々の可能性一般の完全な可変性を明らかにすることによって始めて見出され得るからである。例えば家族の本質としての常数を正當に規定するには、家族の凡ゆる歴史的可変性の段階が予め知られておらねばならず、従って家族の本質規定は今までに存在した家族の諸形式的比較類型学 *vergleichende Typologie* によって始めて基礎づけられることになるからである。それ故この比較類型学的方法は凡ゆる非歴史的な思维方法のもたらす危険、即ち単に特定の時代の偶然的な歴史的现象から無媒介に本質領域に押入ることによって全く偶然的なるものを本質的なものとして絶対視するという危険を防ぐのであり、そうした意味においてこれは前の「非歴史的公理的方法」を有益に補足するものである。

(c) 第三の「歴史的個別化的方法」は前の二つの方法を更に補足完成するものであるが、例えば家族について言えば、家族の形態と内的構造を

唯一の歴史的状況において探求するというところにこの方法の課題がみられるのである。勿論こうした一回性の探求は種々なる具体化の段階において行われることが出来るのであり、例えば現代家族の一回的形態は、あるいはある国においても、あるいは又そのある一つの社会層においても、あるいは更にある社会層における唯一一つの家族についても問題とされることが出来る。しかし何れにしてもこの方法においてはそうした現象の可変性が問われるのではなくして、特定の一回的状況におけるその構造や適合関係や更にはそれが同時に存在する諸他の形象に対してどう関係が問われるのである。

マンハイムはこのように「一般社会学」の研究方法に(a)「非歴史的公理的方法」と(b)「比較類型化的方法」と(c)「歴史的個別化的方法」の三種類のものを区別し、而もこれら三つの方法は夫々独自の権能をもち、従って「一般社会学」の完成のためにはこれらの方法が凡て利用されねばならないと考えるのである。若し非歴史的公理的な社会学のみに重点が置かれると、可変性と一回性の研究は社会化的の常数を得るための単なる手段となり、又反対に一回性の研究のみに重点が置かれると、非歴史的公理的な反省や可変性の観察は単に一回的なものを比較してみることに役立つだけのものとなるのであるから、比較的方法や歴史的方法の完全なる拒否は公理的方法の放棄と同様に不可能なのである。現代においては一方単に一回的な現象のみを有効たらしめ、凡ゆる歴史的形象を本質的に一回的なものとして考察し、従って凡ゆる普遍化をもって歴史の対象を見誤るものとするところの極端に反対すると共に、他方社会現象における現実的具体性の意味を無視するような非歴史的な考察方法に対しても闘わねばならないのである。一回的なものも、実はそれが普遍的なるものから引出され、普遍的なるものと対照せしめられる時にのみ認識され得るのであるから、普遍化や比較の方法は一回性の探求と共に併用されねばならないのである。このようにして「一般社会学」においては普遍的な規則についての知識と同時にその具体化と可変性の諸段階を研究せねばならないのである。そうした相補関係によってのみ普遍的な

るものも具体的となり、一回的なるものも、それが引出されて対照せしめられるところの、背景をもつことになるのである。それ故「一般社会学」は歴史や後に述べる「文化社会学」への関係なしには、恰も押葉のように、乾せ枯らびたものとなるのであり、又逆に一回性や「文化社会学」の考察も「一般社会学」なしには偶然的な特殊状況の絶対化に陥る傾向を有し、そうした特殊状況のうちに働いている諸々の一般的な社会力を見逃してしまうことになるのである。

マンハイムは以上のように「一般社会学」、あるいは「特殊科学としての社会学」の対象を(a)社会「過程」と(b)社会「関係」と(c)社会「形象」に三分し、又その方法に(a)「非歴史的公理的方法」と(b)「比較類型化的方法」と(c)「歴史的個別化的方法」という三種類のものを区別し、これをある場所では「理論社会学」とか、又「狭義の社会学」とも呼んでいるのである。それではこれに対し第二の「特殊諸科学に関する社会学」と呼ばれる部門は何を対象とするのであるかを次に検討することにしよう。

(一)「一般社会学」は今述べたように専ら諸々の社会形態をいろいろの精神的客観体や文化内実から抽象して取扱うのであるが、しかしそうした諸々の精神的客観体や文化内実、例えそれ等が諸々の科学によって取扱われるにはしても、同様に又社会学の問題をなすのである。即ち、社会学者や社会的な関心を有する研究者は或る特定の精神的領域を社会過程 (Sozialprozess) (od. Gesellschaftsprozess) に関係せしめ、そうした特定の精神的領域に対する社会過程の意義を問題にし、諸々の文化客観体のうちに含まれている社会的性格を明らかにすることを要求せられるのである。ここに社会学とその隣接領域に関する諸科学との協力が必要となり、いわゆる「個別諸科学に関する社会学」が成立するのである。例えば経済社会学 Wirtschaftssociologie、法社会学 Rechts-Soziologie、宗教社会学 Religions-Soziologie、知識社会学 Wissens-Soziologie などがそれである。従ってこれは又簡単に「連字符社会学」とか、「特殊社会学」とも呼ばれるのである。尤もこの場合現存する諸科学の何れが或る文化領域に対する社会生活の意義という問題を

探求すべきであるかということは先験的には確定できないのであり、それは常にその時々々の歴史的状況において或る科学から他の科学への通路が何所から比較的容易に可能になるかということに依存するのであるが、しかし兎に角現状においては上に述べたような諸々の「連字符社会学」あるいは「特殊社会学」が社会学の第二の研究部門と考えられているのである。それでは、今までに述べてきた「一般社会学」や「特殊社会学」に対し、第三の「文化社会学」と呼ばれる部門は何を対象とするのであろうか。次にそれを見なければならぬのであるが、実はこの「文化社会学」はマンハイムの社会学論の最も重要な特徴をなすのであるから、多少詳しく検討することにしよう。

(三)社会学は、マンハイムによれば、今日二重の危険にさらされているのである。つまり社会学は一方においては夫に算入され得るものが余りに多様であるために際限のない「凡ゆることに関する科学」Allerweltswissenschaft となるか、あるいは又他方においては単に最初社会学の周辺にあったにすぎないような問題に収縮して煩瑣な悪しき講壇科学 Schulwissenschaft になるという危険に陥っているのである。ところでジンメルからウィーゼに至る社会学に関する論争において用いられた戦術は、唯特殊科学や特殊専門化のみを認めんとした当時の大学の授業経営に方向づけられて、社会学を実証的特殊科学として基礎づけることであつたのである。しかし今日では事情は変り、人々は単なる特殊化のみでは充分でないという見解を次第にもつようになつてきたのである。即ち、現在諸々の科学の限界領域は益々一層養護されてはいるが、しかし又それぞれの科学は相互に他のものを補足するために参照されるということになつてきているのである。例えば芸術史家は様式史を書くために一般思想史を、思想史家は政治史を、政治史は社会史を、社会史は経済史を参照せざるを得ないのである。従つて今日における科学の新しい状況は社会諸科学の成果を一緒に見る zusammenschauen こと(あるいは一緒に考える zusammendenken こと)さらには社会諸科学の内容を統合すること Integration を要求しているのである。人々は諸々の特殊科学において打碎かれた現実認識の全体性 Ganzheit を再構成する道を求め、あるいは

諸々の隣接科学や境界科学の間の協力の形式を探し、更には分析的な努力を補足することの出来る視点を得んと努めているのである。つまり現在に成程特殊化が中止せしめらるべきではないが、しかしそれが総合的な視点 *zusammenfassende Gesichtspunkte* によって補足されるべき時期なのである。

こうした時期においては社会学は成程普遍的科学 *Universalwissenschaft* であるいは博識家 *Polyhistor* たらんとする誤れる要求を立てることは許されないとしても、しかし細分 *Zerstückelung* ではなく総合 *Synthese* を目指すという社会学本来の傾向を新しく取上げ、これを現代的な問題の諸要求に応じて発展せしめるということは実にその義務なのである。いわゆる「文化社会学」は恰もそうした要請によって成立するものに外ならないのである。従ってつまり文化社会学は先の「特殊社会学」のようにある特定の文化領域を社会過程に關係せしめるのではなくして、諸々の文化領域の全体 *Gesamtheit* を社会生活との連関におき、*im Zusammenhang mit dem gesellschaftlichen Leben* 觀察することを課題とするのである。この場合「文化社会学」はそうした諸々の文化領域の全体をその背後に立っている社会生活の「表現」とみるか、さもなければ社会と文化領域の間に「因果關係」や「相互作用の關係」を認めるか、更には両者の間の「弁証法的發展」を前提とするのであるが、しかし何れにしてもそれは精神的歴史的な特殊の諸科学によって引裂かれた現象系列の綜合を企図するのである。それ故この「文化社会学」はあるいは「社会的精神的現象の全体的連関 *Gesamtzusammenhang* に関する学」とか、あるいは又「文化やその發展の社会的性格と文化の特殊の諸領域の生成の全体的連関に関する理論としての社会学」とか、更には又「歴史社会学」とか、「構造社会学」*Struktursoziologie* とも呼ばれているのである。ところで、マンハイムはある箇所で社会学を一方自然科学的な普遍的考察法に従うものと他方歴史哲学の伝統に従うものの二つの類型に區別し、彼自身はトレルチやアルフレット・ウェーバー等と共に歴史哲学の伝統に立つものであると述べており、彼のいわゆる「文化社会学」や「歴史社会学」はまさしくそうした歴史哲学の伝統に結びつくものであるが、しかし彼は又そうした文化社会学における綜合的構成が決して

安易放縱な歴史哲学的思辨に陥らぬように注意すべきである、という。しかしそれにしても、社会学がそうした綜合という課題をもつことは不可避免なのであり、正當なものであることを否定することは出来ないであり、それは決して野望や越権ではないのである。蓋し現実には常に一つの綜合的全体をなしており、現実そのものが社会学にそうした綜合的認識を要求するからである、と。

この様に「文化社会学」は社会的精神的現象の全体的綜合的連関に関する理論として主張せられているのであるが、しかしそうした「綜合」は、前にも一言ふれたように、特殊化が中止せしめらるべきことを要求するものではなく、従って特殊化の方法を必要ならしめるものではないのである。寧ろ現代のような極めて分化の進んだ社会においては人は必然的に専門家たざるを得ないのである。しかしそれにしてもそうした専門的 specialization の研究の最後の段階においては固持することを許さないのであり、そうした段階においては矢張り綜合が要求せられるのである。しかし又この綜合という問題がどれ程重要であるとはしても、それが、例えば弁証法とか形態とかいった種類のある一つの原理のうちに「胡麻よ、開け」式の通路を見出そうとして、余りにも大きい包括的な視点から向う見ずになされることは許されないのであり、従ってそうした綜合的諸原理に達するためには歴史的、社会的現実における諸々の特殊の現象の作用系列を、それらが他の特殊の領域と關係しているままの、現実そのものの経過において追求するという道をとらねばならないのである。例えば芸術家は単に或る芸術作品から他の芸術作品にいたるところの諸々の現象や作用の關係を括弧に入れて結びつけるのみならず、更に芸術的發展に対し同時代の文学、宗教、政治史、社会史などが働きかけたところの作用系列を結びつけて括弧で括らねばならないのである。つまり諸々の現象は、それらが本来括弧づけられているままの連関において、正確に描写せられねばならないのである。そしてマンハイムは綜合的諸原理に達するためのこうした方法を「社会的、歴史的現実における括弧づけの問題」*Verklammerungsproblematik in der gesellschaftlichen historischen*

Wirklichkeit を追求することであると呼び、更には諸々の事象の交錯性 Ineinanderverflochtensein を把握することであるとしているのである。ところで、このいわゆる「括弧づけの問題」は勿論凡ゆる任意の視点、即ち、凡ゆる任意の学問から繰り上げてゆくことが出来る。即ち、そうした綜合は芸術史からも又宗教史からも行うことが出来るのである。又実際そうした研究の当初においては、いろいろの極めて異なる領域から出發する綜合的説明が与えられるであろうし、又そうした出發点の多面性ということは確かに歓迎せらるべきものであらう。マンハイムはこのように諸々の観点から出發する綜合の試みの正当性を承認しながらも、なお、いわゆる文化社会学にこうした綜合の問題を追求するという全く特別な義務を帰するのであるが、それは現実そのものにおける諸々の異なる文化領域の連関はその集中点 Konzentrischer Punkt を社会生活 Gesellschaftsleben のうちに持つており、それらがある特定の人間集団の生活と運命の表現であるということに基づくのであり、更には又精神的現象の諸領域は結局において社会の運命的現象連関によって統合されているからである。⁽¹⁹⁾それ故歴史的、精神的現象の「括弧づけの問題」は先ず何よりも社会学によって行われねばならないのである。社会学のみが社会史 Sozialgeschichte に基づいて諸々の領域における文化客観体を考察して、それらの歴史を有機的に接続せしめている基礎的現象連関を把握することが出来るのである。⁽²⁰⁾しかしながらこうした「括弧づけの問題」の提示は歴史的現象における優位性に関する決定を何ら意味するものではなく、それはただ社会生活の諸条件の変化から諸々の精神的客観体の変化に入り込まんとする設問の方向を示すに過ぎないのである。ところで又こうした文化社会学的綜合が、マンハイムにおいては、「本来的に社会学的なもの」das eigentlich Soziologische に外ならないのである。即ち「本来的に社会学的なもの」は諸々の現象系列の相互依存性 Interdependenz を強調し、あるいは諸々の事象の根本的な括弧づけを探索し、さらには何ものも孤立の或抽象的には見ないで、専門的な抽象的科学が単に暫定的に現象の統一性から抽象して孤立的に考察しているところの、現実の諸要素や諸領域の共存

関係 Symbiose の根本構造を明らかにせんと努力することにあるのである。つまり社会学的思考 das soziologische Denken の本質はこのように連結的に見ることが出来る kohärent sehen können ということ、あるいは一見孤立的に与えられているように見える諸事実を社会的生活連関から vom sozialen Lebenszusammenhang her 把握することに認められるのである。そこからしてマンハイムは、一方においては成程社会学は自からそのみで諸々の学問の綜合に必要な研究資料を提出することは出来ず、従ってそうした諸領域においては常に夫々の専門家に頼らねばならないのであるが、しかし他方においてはそれに反しそれぞれの専門家は新しく現われてくる綜合の問題の媒介者 Vermittler や支担者 Träger を、あるいは又そうした綜合的研究成果のその時々々の發展段階の消息通 Kenner を社会学者に求めることが出来る、というのである。特殊の専門家のみによってなされた綜合は比較的大なる資料支配という長所をもつが、しかし常に時代遅れの古びた社会学理論や仮設をもって議論を進めるといふ危険に陥るのである。それ故社会学が自から綜合的研究の計画を立て、しかもその場合諸他の学科に対しても同様の計画を立てる権利を否認せずに、新しい綜合的研究の完成における言わば重要な包装場 Umschlagsplatz となるということがその最も重要な課題の一つなのである。⁽²¹⁾

このように文化社会学は文化の特殊的諸領域の綜合的連関を探索するものであるから、それは文化諸科学や社会諸科学の基礎科学 Grundwissenschaft たることが出来るのである。従って社会学は「一般社会学」という形においては特殊科学 Spezialwissenschaft として成立し、又「文化社会学」という形においては基礎科学として成立するのであり、特殊科学と基礎科学という二重の形式と機能をもつことが出来るのである。又同様の理由からして、社会学は将来単に特殊的な専門的知識にかかわる特殊学科 Spezialfach としてのみならず、更に全体的な教養的知識を与える教養学科 Bildungsfach として形成されることが望ましいのである。⁽²²⁾又こうした文化社会学的综合認識という課題に基づいて、社会学者は一つあるいは二つの隣接領域において専

門家たるべきであるとか、社会科学の凡ゆる研究家はすべて少なくとも二つの領域に携さわり、あるいはその生涯の後半においては別の領域に入って研究すべきであるとも言われるのである。²⁴⁾ 又同じ観点から、社会学的理論の中心は孤立的な個人というものは連関から人為的に抽象された単なる部分にすぎないことを示すことであり、²⁵⁾ 更には社会学は全体的人間を研究すべきものであるなどともいうのである。²⁶⁾

しかし社会学がこうした総合を課題とするとしても、それは決して社会学が哲学一般にとつて代ろうとすることを意味するものではないのである。²⁷⁾ 前にも触れたように、「文化社会学」の問題は成程従前の歴史哲学から生じているのではあるが、それは決して社会動学の全体を早急に又独断的に構成すべきではなく、従って、例えば歴史における弁証法や形態に関する議論の場合にみられるように、いろいろの全体的仮説が何所までも相対立するにいたるような非生産的な始末のつかない思弁的歴史哲学を作ることとを目的とすべきものでは決してないのである。勿論社会現象のいろいろの具体的問題点から全体的連関のうちに前進することが多く試みられた後には、漸次特定の歴史的社会的統一の全体的構成や一回的發展構造の問題に到達するであろう。しかし社会現象のこうした問題提出は断定的 *dogmatisch* 性格でなしに、仮説的 *hypothetisch* 性格をもつことになるであろう。こうした観点からみるならば、マルクス主義やアルフレット・ウェーバーの文化社会学や実証主義的段階論なども、ただ発見的仮設的価値をもつに止まるであらう。そして余りにも性急に経験の先走りをする全体的総合のもつ危険は、我々が常にそれと並行して新たに個別的事実から「括弧づけ」を行って、問題を拡張することによって避けられねばならないのである。こうした二重の運動が存する場合においてのみ、文化社会学は実のり多い研究をなし遂げることが出来るのである。そして又前にも触れたように、いわゆる「一般社会学」がこうした「文化社会学」や歴史への関係なしには乾せ枯らびたものとなるに對し、「文化社会学」も「一般社会学」なしには偶然的、特殊な状況の絶對化に陥り、そうした特殊な状況のうちに働いている諸々の一般的な社会力を見逃してしまうことになるのである。²⁸⁾ 以上のように、マンハイムは文化の

特殊の諸領域の総合的連関を目指し、社会諸科学の統合を課題とするところの、こうした「文化社会学」を「本来的に社会学的なるもの」であるとし、これを「一般社会学」や「特殊社会学」と共に社会学のいま一つの部門として強調しているのである。そしてマンハイムにおいては「一般社会学」と「特殊社会学」と「文化社会学」というこうした三つの研究部門が「社会学的」といえる問題領域なのであり、従って社会学の極小概念 *Minimumbegriff* をなすのである。²⁹⁾

マンハイムは、今まで述べてきたように、社会学の研究領域を(一)「一般社会学」と(二)「特殊社会学」と(三)「文化社会学」とに三分するのであるが、しかし彼は又これら三つの研究領域の外に、体系的な観点からみるならば成程社会学の特殊の範疇をなすものではないが、しかし諸々の研究技術上の理由から社会学の比較的新しい發展における特殊の領域として(a)社会誌 *Soziographie* や統計学 *Statistik* と(b)現代学 *Gegenwartskunde* との二つの研究領域を挙げているのである。次にこの二つの領域を簡単に検討しておく。

(a)³⁰⁾ 社会学にとっては一面において構成的に見ること *des Konstruktiven* *Sehen* が重要であると同時に、しかし又他面においては社会的状況の純粹に經驗的な状態に対する洞察が鋭くなることも肝要なのである。構成的に見ることは粗雑に觀察された事実を正確な資料として受取ったり、あるいは又純粹な仮設を相互に結びつけやすくなるという危険をもっている。それ故そうした構成的思维が過剰になることに對する補償として正確な記述方法や計量的処置、即ち社会誌や統計学を用いることが極めて望ましいのである。こうした方法は特にアメリカにおいて發達し、既に多くの業績を収めている。しかしこうした記述的計量的方法の過剰も又現実の構成的把握に對する感覚の鈍麻や現実の諸々の連関の隠蔽を生じやすいが故に、それを絶対視することには避けねばならないのである。こうした方法は構成的な思维を支持するために用いられる場合にのみ現実的正当性をもつのである。

(b)³¹⁾ 次に現代学は、前にも述べたように、社会学の体系化の要求からは

是認せらるべきものではないが、社会学的研究において新しく生じている今一つの領域であり、その一般的主題をなすものは、民主主義的な社会秩序の普及に関連しているところの、現代人の生活の方向決定という要求 *Orientierungsbedürfnis*⁽³²⁾ あるいは自我の方向決定 *Selbstorientierungsbedürfnis*⁽³³⁾ に応ずる問題連関なのである。こうした現代学はまず第一の段階においては現代における社会誌的知識の単なる総和として解釈することが出来るのである。即ち、それは例えば現代人の生活様式、居住様式、自由時間のあり方、分業や労働機構や職業の影響、家族生活や隣人関係の意義等々の問題に関する凡ゆる事実の描写と解することが出来る。しかしこの現代学の第二の段階においてはそうした知識を単に要約して並列することでは不十分なのである。つまりこの段階においては現代生活の諸々の部分領域が如何なる構造的連関を形成しているかを問わねばならないのである。そしてこうした構造連関を探索することが現代学の本来の課題なのである。即ち、それは何よりも先ず現代の増進する社会の分業や分化によって益々隠蔽せられつつあるところの社会の根本的諸連関を展望的 *übersichtlich* に形成するという要求に応ずるものである。従ってこの現代学によって先に述べた文化社会学や構造社会学が言わば下から準備されてくることになり、更には社会的現代学は不知不識のうちに文化社会学、あるいは歴史社会学にまで括まってゆくのである⁽³⁴⁾。ところでマンハイムは、ここでも又こうした現代学は任意の専門家によって研究されることの出来るものと考えないことは許されないものであり、前にも述べたように文化の特殊の諸現象の交錯せる連関は社会生活から描写されねばならないという指導原理が確定せられる限り、それはただ社会学者によってのみ適切に解決し得る課題であるだろう、というのである。そして又こうした個人的及び社会的な生活の方向決定という極めて現実的具体的なる課題をもつ社会学の現代学が抽象的な一般社会学と並んで教えらるる場合には、それは一般社会学に対しても役立つものとなり、一般社会学が過度の形式化や早急なスコラ主義に陥ることを防ぐことにもなるというのである⁽³⁵⁾。マンハイムは以上のように社会学の研究領域を「一般社会学」と「特殊社

会学」と「文化社会学」に三分し、これらを合わせて社会学の極小概念と呼ぶのであるが、更にそれに対し研究技術上の理由からその特殊領域として「社会誌」や「統計学」と「現代学」を挙げ、先の社会学の極小概念にこれ等の特殊領域を加えた広大な研究領域を社会学の極大概念 *Maximumbegriff*⁽³⁶⁾ であると述べているのである。われわれは今までマンハイムの社会学論の概要を検討してきたのであるが、次に節を新めて、これを吟味することにしたと思う。

- (1) Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie, 1932
 - (2) この部分については大体 *ibid.*, SS. 6—14 参照
 - (3) *ibid.*, S. 58
 - (4) *ibid.*, S. 43
 - (5) *ibid.*, S. 14f.
 - (6) この部分については大体 *ibid.*, SS. 14—17 参照
 - (7) *ibid.*, S. 22
 - (8) マンハイムの知識社会学に対する私見については拙論「カール・マンハイムの知識社会学に関する若干の批判」(富大経済論集、第二巻、第二号) 参照
 - (9) この部分については大体 *ibid.*, SS. 22—27 参照
 - (10) *ibid.*, S. 3
 - (11) *ibid.*, S. 51f.
 - (12) *ibid.*, S. 4f., 52
- マンハイムによれば、形式社会学は極めて高度の抽象化と形式化を示しているであり、それは成程社会学の一つの可能性としては是認せらるべきものであるが、しかし具体的状況と一回性の動学を隠蔽するものに外ならないのである⁽³⁷⁾。(Wissenssoziologie, Handwörterbuch der Soziologie, 1931, S. 664, 675, Historismus, Archiv für Sozialw. u. Sozialp., Bd. 52, 1924, S. 51, 樺俊雄訳「知識社会学の問題」四九—五一頁参照)
- (13) Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie, S. 6
 - (14) *ibid.*, S. 48f., 50, 58
 - (15) *ibid.*, S. 21

(16) 樺俣雄訳、知識社会学の問題、四九—五一頁

(17) マンハイムは、その社会論においても又そのいわゆる「知識社会学」においても、アルフレット・ウェーバーに深く結びついているのであり、そのうちマンハイムの「知識社会学」とウェーバーとの関連については曾って拙論「カール・マンハイムの知識社会学に関する若干の批判」〔富大経済論集、第二巻、第二号〕において述べたことがあるので、ここでは次にウェーバーの社会学論の概要を示すことによってそれとマンハイムの社会学論との関係を簡単に指摘しておくことにしよう。

ウェーバーによれば、社会学は人間の共同生活の諸形式を取扱う理論（形式社会学や関係学）や人間の諸々の結合や団体に関する理論として研究されることも出来るが、しかしそうした社会学は決して社会学の本質的な対象を取扱うものではなく、従って本来の社会学ではないのであり、それは精々「社会論（Gesellschaftslehre）として特徴づけられるに過ぎないのである。特に形式社会学は社会学関係の諸形式の組織化や目録を作ることに専念し、その結果生の問題に答えることが出来ず、歴史的生の総合的展望を欠き、生に疎遠なものとなってしまうのである。こうした形式社会学のような「社会論」に対し、本来の社会学は飽くまでも歴史的生の全体に関するものでなければならないのである。そこからしてウェーバーは本来の社会学として「文化社会学」Kultursociologie¹⁾あるいは「歴史社会学」Geschichtssociologie (od. Soziologie der Geschichte) を主張するのである。従って「文化社会学」あるいは「歴史社会学」はつまり従来の歴史哲学の課題を経験的実証的な形式において継承するものであり、従って歴史的生の全体の体系的構造的な全体的分析によって諸々の社会的事実と社会を超えた事実との結合を経験的実証的に、しかも総合的展望的に解明し、更には又それに基づいて現在における生や文化の問題を純粹なる理論の立場から解釈することを課題とするのである。ウェーバーはこうした「文化社会学」を更に厳密には狭義の「一般的『文化社会学』あるいは『文化社会学』そのものと『特殊的文化社会学』」に区分するのである。狭義の「一般的『文化社会学』」とは今上に述べたような歴史的生の全体を社会的事実と社会を超えた諸々の文化全体の事実との一般的結合において取扱うのであり、それに対し「特殊的文化社会学」とは、例えば宗教社会学や法社会学などのように、諸種の特種な文化領域の本質的内実や表現形式を或る特定の時代や歴史的範囲の社会的事実と結合すること、即ち社会的事実と

諸々の特種な文化領域との特種な結合を問題とするのである。このように、ウェーバーは、社会学は本来「文化社会学」なのであり「文化社会学」こそが本来の社会学である、とするのである。そしてマンハイムの「文化社会学」の思想が社会学史上実はこのウェーバーの「文化社会学」の思想などに深く結びついているのである（A. Weber, Kultursociologie, Handwörterbuch der Soziologie, 1931, S. 285, 290f., 291, 292, Ideen zur Staats- und Kultursociologie, 1927, S. 5, 6, 7, 10, 51f.）

なおウェーバーのこうした「文化社会学」論に対するわれわれの立場は次に述べるマンハイムの「文化社会学」論に関するわれわれの吟味によって自ら明らかとなるであらう。

- (18) Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie, S. 45f.
- (19) *ibid.*, S. 53
- (20) *ibid.*, *ebd.*
- (21) *ibid.*, S. 55f.
- (22) *ibid.*, S. 3f.
- (23) *ibid.*, SS. 44—51
- (24) *ibid.*, S. 52, 61
- (25) *ibid.*, S. 51
- (26) 樺俣雄訳、知識社会学の問題、一二三頁
- (27) Die Gegenwartsaufgaben der Soziologie, S. 53ff.
- (28) *ibid.*, S. 14
- (29) *ibid.*, S. 2f.
- (30) 上の部分については *ibid.*, SS. 28—30 参照
- (31) 上の部分については *ibid.*, SS. 30—32 参照
- (32) *ibid.*, S. 36
- (33) *ibid.*, S. 48f.
- (34) *ibid.*, *ebd.*
- (35) *ibid.*, SS. 42—44
- (36) *ibid.*, *ebd.*, S. 33

二

マンハイムの社会学論は、序文で述べたように、又第一節の説明で大体明らかとなったように、社会学史においては、「綜合社会学」の止揚として成立したところの、「形式社会学」を更にいろいろの形において補足克服せんとする現代社会学の課題に答へんとするものであり、それはそうした問題を扱っている幾つもの社会学論のうちで一つの注目されてよいものであると思う。しかし私はそれに対しなおいくつかの点について疑問や異論をいだかざるを得ないのである。それで次にマンハイムの社会学論の全体に対し順次疑問を提出し、更には吟味や批判を加えてみたいと思うのであるが、差当りここで先ず社会学の対象と方法という問題に対する私見の大まかな輪郭を先取して示しておくことにしよう。

我々は先ず、諸々の学問はすべて夫々現実の世界を特定の固有な範疇に基づいて取扱うのであり、又正にその事によって学問の分類も可能となるものである限り、社会学も当然諸他の学問と共に固有の基礎的範疇をもつ可きものである、と思う。ところで諸々の学問のもっているそうした特殊な固有の基礎的範疇は勿論最初から先験的に一定不変のものとして立てられるものでないことは多くの学問の歴史が示している通りであり、社会学においても従来その基礎的範疇と考えられるものが若干の変化を経てきているのみならず、今後においても更に特定の領域における認識成果の充実によりそうした領域を包括する範疇を更に新たに獲得しようということは当然予測され得るのである。しかしながら我々は、社会学の現在の段階においてはそうした基礎的範疇と考えられ得るものは社会集団と社会関係と社会的行為である、と思う。勿論社会的行為と社会関係と社会集団という三つのものは現実の實在関係においては常に相互に媒介されており、更には相互に底礎づけの関係において結びついているのであるが、それを科学的操作の必要上そうした異質的契機に分析して取扱うわけである。それら三つの範疇のうち、先ず社会集団はしばしば社会形象 *Gebilde* などと呼ばれていることもあるが、これは

従来早くから社会学独自の対象として取扱われているのであり、そうした諸々の社会集団の種類、構造、形態、機能、関連、変動等を記述説明することは依然として社会学の課題をなすのである。次に社会関係は特に形式社会学によって確立された対象であり、これについてもそれらの種類、構造、機能、関連、変動等を記述説明することは同様に社会学の問題をなすのである。最後に社会的行為はしばしば社会過程などと呼ばれているものに大体類似するものであるが、これについてもその種類、類型、構造、関連、変動等を記述説明することが社会学の問題をなすのである。このように社会学の現段階においては社会的行為と社会関係と社会集団がその基礎的範疇あるいは基本的対象を構成しているものであり、社会学はそれら三者の種類、構造、機能、変動等を記述説明すべきものである。これが社会学の対象についての我々の根本的立場であるが、次にその方法に関しては我々は大體マックス・ウェーバーの、いわゆる理想型 *Idealtypus* 論の立場を採る。即ち、社会学は社会的行為や社会関係や社会集団の構造や変動等に関し理想型的理論を構成し、又そうした理想型的理論を基礎にして、いろいろの時代や地域におけるそれらの特殊的具体性を明らかにすべきなのであり、その場合前者の理論的研究部門と後者の歴史的研究部門とは論理的には決して時間的先後の関係にあるものではなく、同時並行的になさるべきものであり、しかもそうすることによって両者が共に相互に促進し合い、研究の成果を循環し合うべきものである。ことはいうまでもない。これが我々の社会学的方法の根本的立場である。従つてつまり社会学は歴史的社会的現実における社会的行為と社会関係と社会集団との構造及び変動を理論的に又歴史的に記述説明せんとするものであると思う。

社会学は、このように、根本的には歴史的社会的現実における社会的行為と社会関係と社会集団の構造及び変動を理論的に又歴史的に解明せんとするものであると考えられるのであるが、しかしそうした対象をそうした方法によって取扱う際の視点、あるいは立場のとり方によって社会学は一応更に次の三つの研究部門に区分され得ると思う。

(一) 先ず我々は、社会的行為や社会関係や社会集団の理論と歴史を夫々個別的孤立的に、又一般的類型的に、従ってそれだけ抽象的に取扱うことが出来るが、こうした視点や立場から社会学の一つの研究部門が構成される。これを我々は多くの例にならって「一般社会学」と呼ぼうと思う。

(二) 次に我々は、社会的行為や社会関係や社会集団が文化の諸々の特殊の領域、例えば経済や宗教などにおいては如何なる形成、構造、機能、変動などを示しているかを、特殊の個別的に又理論的歴史的に探求することが出来るが、こうした視点や立場から生ずるところの、例えば経済社会学や宗教社会学などの研究部門を我々は「特殊社会学」と呼ぼうと思う。

(三) 最後に我々は、社会的行為と社会関係と社会集団の構造や変動等が文化の多くの、あるいはすべての領域において示す諸々の徴表を統一的綜合的に把握し、そうすることによって夫々の時代や地域における社会の文化の社会学的概念を理論的及び歴史的に求めるべきであると思うが、こうした視点や立場から生ずる社会学の研究部門を我々は今一応文化社会学と呼んでおきたいと思う。

これが我々の考える現段階における社会学の三つの研究部門なのであるが、勿論これらの三つの研究部門は分類上及び研究操作上の理由によって区分したものであり、実際にはこれら三つの研究部門は密接に関連しており、又そうすることによって相互に促進補足するべきものであることはいうまでもないのである。我々は、以上のように、社会学の研究領域は先ず社会的行為論と社会関係論と社会集団論に分れ、更に一般社会学と特殊社会学と文化社会学とに区分され、しかもそれらは又すべて夫々理論的部門と歴史的部門とに区劃されるのであり、かかるものとしてそれは一つの特殊的社会科学である、と考えるのである。⁽²⁾これが社会学論に対する我々の根本的立場であるが、次にこれに基づいてマンハイムの社会学論を、順次吟味し、更にその際われわれの立場を一層布衍してゆくことにしたいと思う。

マンハイムは先ず社会学を「一般社会学」と「特殊社会学」と「文化社会学」の三つの領域に区分するのであり、従ってこれは今述べた我々の立場

と、その外観や術語において、極めて類似したものと思われるかもしれないが、しかし我々の立場はいくつかの点においてマンハイムの立場とは多少異なり、更にある点においては根本的に相異すると言わざるを得ないのである。先ずマンハイムの「一般社会学」の内容から吟味してゆくことにしよう。

(一)、先ずマンハイムの「一般社会学」は「特殊科学としての社会学」という形において考えられており、かかるものとしてそれは(a)社会「過程」と(b)社会「関係」と(c)社会「形象」という三つの対象をもつのであり、しかもこうした特殊科学としての「一般社会学」が社会学の「中核的部分」、あるいは「シネ・クワ・ノン」であると言われるのである。ところでマンハイムの「一般社会学」における「過程」と「関係」と「形象」とは我々の「一般社会学」における「社会的行為」と「社会関係」と「社会集団」と大体同一の内容のものであり、従って我々はこの点においてはマンハイムの見解を大体承認すべきであると思う。形式社会学を批判することによって、いろいろの形において、文化社会学や歴史社会学などを主張する人々のうちには性急に社会関係の形式を社会学の対象としては軽視、あるいは無視するむきもあるようであるが、マンハイムはその点においては社会「関係」を、社会「過程」や社会「形象」と共に、とり上げていたのであり、その点公平と思う。しかもこれらの対象を取扱う「一般社会学」を社会学の「中核的部分」であるとみているのも妥当というべきであろう。次にマンハイムは「一般社会学」の研究方法として(a)「非歴史的公理的方法」と(b)「比較類型的方法」と(c)「歴史的個別化的方法」の三種類を挙げているのであるが、これは一見我々の理念型的理論構成と歴史的特別性の究明といった方法の立場と可成り相異すると思われるかも知れないが、しかし本質的にはそれ程相異するものでもないと思う。我々は社会学の方法論としては根本的にはマックス・ウェーバーの理念型論を採るのであるが、周知のようにウェーバーの理念型構成の手続のうちには当然マンハイムの「比較類型化的方法」や「非歴史的公理的方法」が大体含まれているわけである。又マンハイムの「歴史的個別化的方法」もそうした理念型的理論を手がかりとして行われる

歴史的特殊性の究明ということと大体同じことであろう。とすれば、一般社会学の方法に関しても、マンハイムの立場と我々の立場は略々同一とみてよいかも知れないが、しかしこの点、特に理念型構成論に関しては矢張りマックス・ウェーバーの説明が一層精密正確であり、我々も大体それに倣うべきであると思う。それ故マンハイムにおけるこの「一般社会学」には多少の修正が必要ではあるが、我々の考える「一般社会学」と略々一致するのであり、従って大体承認されてよいと思う。

(二)、次にマンハイムの「特殊社会学」は特定の文化的精神的諸領域を社会過程に関係せしめ、そうした特定の文化的精神的領域に対する社会過程の意義を問題にし、諸々の文化客観体のうちに含まれている社会的性格を明らかにすることを課題とすると言われるのであり、従ってこれも一応我々の考える「特殊社会学」と大体一致するようと思われるのであるが、しかし厳密にみると細かな点において疑問がないわけではないのである。というのは、先ずマンハイムの「特殊社会学」の課題は特定の文化的精神的諸領域を社会過程に関係せしめ、それらに対する社会過程の意義を問うことである、と規定されているのであるが、この場合に用いられている社会過程 Sozialprozess (od. Gesellschaftsprozess) というものが一体何を指すのか多少明確を欠くと思われるからである。即ち、一体この「社会過程」は、前に「一般社会学」の対象として規定されたところの、「社会化の過程」 Vergesellschaftungsprozesse と同一の内容を意味するのか、あるいはそうではなくして、そうした「社会化の過程」として更に区分された (a)「過程」(b)「関係」(c)「形象」という三つのうちの (a)「過程」のみを指すのであるか、ということが一見したところでは明確ではないのである。尤もマンハイムは、他の場所では、「特殊社会学」を規定して諸々の文化客観体のうちに含まれている「社会的性格」を明らかにするものであるとも述べているのであり、又この「特殊社会学」そのものが元来、「一般社会学」において諸々の文化内実と切り離して取扱われた社会化の諸過程としての (a)「過程」(b)「関係」(c)「形象」を、今度はそれ等に結びつけて考

えようとするところに成立するのであるから、マンハイムが「特殊社会学」の問題を規定する場合に用いている、いわゆる「社会過程」は、「一般社会学」の対象とされたところの、いわゆる「社会化の過程」に従って (a)「過程」はもとより同時に (b)「関係」や (c)「形象」をも共に含意するものと解するのが正当と思われる。しかしそれにしても矢張りこの点の叙述や用語が少し明確を欠くことは否定できないと思う。ところで、マンハイムの「特殊社会学」が特定の文化的諸領域における (a) 社会「過程」、(b) 社会「関係」、(c) 社会「形象」を取扱うものであり、又 (a) 社会「過程」、(b) 社会「関係」、(c) 社会「形象」が大体我々の、いわゆる (a) 社会的行為、(b) 社会関係、(c) 社会集団と同一のものであるとすれば、それは明らかに我々の考える「特殊社会学」と一致するものであり、その限りマンハイムの「特殊社会学」は承認されてよいのである。しかし又この「特殊社会学」が特定の文化的諸領域を (a) 社会「過程」や (b) 社会「関係」や (c) 社会「形象」という社会学固有の問題点から取扱うものである限り、そうした「特殊社会学」は現実にはもとよりこうした問題に関心する凡ての人や科学者によって取扱われ得るものであり、又マンハイムの言うように確かにこの領域においては関係諸学科の協力が必要なのではあるが、しかしそれは学問論的には明らかに社会学固有の領域に属するのであって、決してマンハイムの言うように何れの科学がそれを探求すべきか先験的に確定できないものとは言えないと思う。次に又マンハイムは先の「一般社会学」においてはその方法として詳しく (a)「非歴史的公理的方法」と (b)「比較類型化的方法」と (c)「歴史的個別化的方法」を三分して説明しているに拘らず、この「特殊社会学」に関してはそうした方法については何ら語るところがないのであるが、これは明らかに片手落ちであって、不充分と言わざるを得ない。我々は、この「特殊社会学」においても前に述べた理念型的理論構成と歴史的特殊性の究明が必要であり、従って理論的研究部門と歴史的研究部門が成立する、と言わねばならないのである。

(三)、最後にマンハイムの「文化社会学」について吟味しなければならな

いのであるが、これに対しては、我々は一番多くの、又根本的な疑問や異論をいだかざるを得ないのである。次にここではそれらのうちの最も重要と思われる点のみを簡単に指摘しておくことにしたいと思う。マンハイムは、前に述べたように、一方においては「一般社会学」を社会学の「中核的部分」であるとしながら、又他方においてはこの「文化社会学」の課題を「本来的に社会学的なるもの」として重視し、その課題を、先の「特殊社会学」のようにある特定の文化領域を社会過程に關係せしめることではなくして、諸々の文化領域の全体を社会生活との關係において觀察すること求め、精神的歴史的な特殊諸科学によって引裂かれた現象系列の綜合を企図するのである。このように、マンハイムの「文化社会学」の課題は、ある箇所では、「特殊社会学」のようにある特定の文化領域を社会過程に關係せしめるのではなく、諸々の文化領域の全体を社会生活との關係において觀察することであるとするのであるが、この場合に用いられている「社会生活との關係において」とか、あるいは又「社会過程に關係せしめる」という言葉は諸々の文化領域の全体を先に述べた、いわゆる(a)「過程」、(b)「關係」、(c)「形象」という「視点」から「綜合」することを意味するのかが甚だ不明確なのである。否、それどころか、前に述べたような、その他の多くの説明においてはそうした「視点」は全然問題にされずに、卒然と「社会的精神的現象の全体的連関に関する学」や「文化やその発展の社会的性格と文化の特殊諸領域の生成の全体的連関に関する理論」としての「文化社会学」などが語られているのである。つまり公平にみて、マンハイムの「文化社会学」は特定の視点や範疇なしに一挙に諸々の文化全体の「綜合」や「統合」を作り出そうというのである。しかしこれは、先の(a)社会「過程」や(b)社会「關係」や(c)社会「形象」を取扱う「一般社会学」を社会学の「シネ・クワ・ノン」として規定したところの、マンハイムの社会学論の立場としては退歩であり、混乱という外はないと思う。それは明らかに曾っての「綜合社会学」への逆行であろう。勿論我々はそうした意味での全体的綜合が如何なる意味においても不可能であり、不必要であるなどというので

はない。それはいわゆる歴史哲学や社会哲学などとして可能であり、又社会学はいろいろの形においてそれらに密接すべきものであろう。しかしそれは決して厳密な意味での社会学としては許されないものである。そうした特定の「視点」なき「綜合」は、例え諸々の異なる文化領域の連関がその「集中点」を「社会生活」のうちにもつとか、あるいはそれらが結局において「社会の運命的現象連関」によって統合されているから等と言ってみても、決して「本来的に社会学的なるもの」であることにはならないと思う。従ってそうした意味での「綜合」が何よりも特に社会学によって行われねばならない「義務」もなければ、又特に社会学がそうした「統合」の「媒介者」や「包装場」になる権利もないのである。だからといって、勿論我々はマンハイムの強調する綜合的認識の現代的要請を知らないわけではないのである。しかし社会学において、若し何らかのそうした綜合的認識が成り立つとするならば、それは何処までも社会学固有の「シネ・クワ・ノン」を通してでなければならぬと思う。即ち、社会学は何処までもその「シネ・クワ・ノン」たる(a)社会的行為や(b)社会關係や(c)社会集團という視点を通ることによってそれらの構造や變動などが文化の諸領域において示す諸々の徴表を統一的に綜合し得るのであり、又そうすることによってそうした社会学の概観を作らねばならないのである。そうした社会学固有の視点や範疇を介しないところの、文化現象全体の綜合は、例えいかに必要であり、又可能であるとしても、それは決して社会学の領域に属するものではなく、いわんや決して「本来的に社会学的なるもの」とは言えないのである。マンハイムにおける「文化社会学」の見解は「綜合」への余りに性急な志向のため、社会学や社会科学一般の正当な特殊化や専門化の意義を輕視し、更には社会学に不可欠な特殊の視点の喪失さえも招来しているものと言わねばならないのである。我々も、成程諸々の社会科学が夫々特殊な固有の視点や範疇を持ち、又固有の専門領域をもつ限り、屢々そうした専門領域にのみ閉じこもって、社会的現実に対する開かれた展望を失い易いという危険をもつことを、認めざるを得ないのである。しかしながら専門のみに閉じこもり、専門のみ

に踞踏するという意味の専門化は実はただ悪しき意味における専門化に過ぎない。諸々の社会科学は本来は夫々に固有の視点や範疇を通して広く社会現象のあらゆる領域に視野を開き、そうした領域に対し開かれた豊かな展望をもつことが出来るのであり、今日諸々の社会科学がそうした方向に進むことによって悪しき専門化の弊は充分解消できると思う。それ故今日専門化の弊が甚大であるからといって、そこから直ちに社会諸科学の直接無媒介なる綜合を主張し、しかもそうした課題を社会学に課するという、マンハイムの見解は、専門的立場が本来現実に対する開かれた展望と両立し得るものであり、更には諸々の社会科学はすべて特殊な固有の範疇を「シネ・クワ・ノン」としてもつという認識論的事実を充分反省せざるものと言うべきであろう。今日社会諸科学の「綜合」がどれ程要望せられているとはしても、それは決してマンハイムの考えるような形で「文化社会学」を正当づけるものではない。つまり社会学は何処までもその「シネ・クワ・ノン」たる(a)社会的行為や(b)社会関係や(c)社会集団という範疇を介して始めて正当にそうした綜合的展望を広く開くことが出来るのであり、そうした形においのみ「文化社会学」も成り立つのである。そしてこうした意味での「文化社会学」は今日唯に可能であるのみならず、極めて必要であると言わねばならぬのである。しかしそれにしても、マンハイムの考える「文化社会学」は、マンハイム自身しばしば警戒し注意しているに拘らず、結局いわゆる「歴史哲学」風なものとなり、更には単なる「博識家」を生むことにならざるを得ないのである。ところで、又マンハイムは、前にも述べたように、「一般社会学」についてはその研究方法を(a)「非歴史的公理的方法」と(b)「比較類型化的方法」と(c)「歴史的個別化的方法」の三種類に分けて精しく述べているのであるが、しかしこの「文化社会学」的綜合の方法や手続については充分な説明を加えていないのであり、こうした「綜合」の方法や手続に対する充分な反省の欠如が又彼を結局卒然と安易に「綜合」への要求に駆り立てたのであらうと思う。我々の意味における「文化社会学」的綜合は、繰返して言えば、何所までも社会的行為や社会関係や社会集団という視点に基づ

いて、しかも理念型的理論構成と歴史的的特殊性の究明を並行的相補的に行うことにより、逐次言わば下から上へ積み上げてゆくという手続に従うのであるが、これに対しマンハイムの「綜合」は、如何に辯解されていても、結局古い歴史哲学風に一挙に無媒介に「綜合」の理論を打ち出し、これを更には絶対化するという危険から免れることが出来ないと思う。それ故社会科学の現状においてはマンハイムの言うような「文化社会学」的綜合は少くとも社会学の本来的課題であることは出来ないものであり、それは一見如何に魅惑的にみえようと、社会学の問題としては不可能と言わざるを得ないと思う。勿論我々は、前にも述べたように、マンハイム流の「綜合」が全然如何なる形においても不可能であるとか、又不必要であるなどと言うのではない。しかしこれを認めることとマンハイムの「文化社会学」を認めることは一応別の問題なのである。現状においては文化社会学は、繰返して言えば、何所までも社会的行為と社会関係と社会集団という社会学固有のシネ・クワ・ノンに基づいて社会的現実の構造や變動を綜合展望するところに成立するのであって、又社会学はそうすることによって充分現実的具体性を獲得し得ると思う。

私は今までマンハイムの社会学論を検討し、更にそれを私見に基づいて大まかに吟味してきたのであるが、しかし勿論前にも述べたように、何れの学問においてもその対象や方法は決して先験的に不変のものとして確定せられているわけではなく、従って今後社会学の対象と方法についてもいろいろの発展が当然予測され得ると思う。この小論はマンハイムの社会学論に關説して、ただ現段階における社会学の対象と方法という問題について大まかな私見を述べてみたに過ぎないのである。最後に私は、マンハイムと共に、次のマックス・ウェーバーの美しい言葉を引用して一応この小論を結んでおきたいと思う。

》Es gibt Wissenschaften, denen ewige Jugendlichkeit beschieden ist, und das sind alle, denen... der Fluß der Kultur stets neue Problemstellungen zuführt...《

(1) マックス・ウェーバーは、周知のように、社会的行為を解釈しつつ了解し、そうすることによって社会的行為をその経過と諸結果において因果的に説明せんとする「了解社会学」を主張したのであるが、その場合ウェーバーの社会的行為の概念が狭すぎることに、又そうした社会的行為のみを社会学の対象とすることも社会学の対象を狭く評価したものであることなどに関する私見は拙論「マックス・ウェーバーの理解社会学に関する若干の批判」(富大経済論集、第二巻、第一号)において簡単に述べたところである。なおその際 *Verstehende Soziologie* を理解社会学と訳したのであるが、日本語としてはそれよりも了解社会学の方がウェーバーの真意に近いと思われるので、了解社会学に改めたいと思う。

(2) こうした私見はもとより多くのものを内外の諸思想、もとより又マンハイム自身の思想にも負うているのであるが、ここではそれらの点をいちいち指摘することは、紙数の都合により、一切省略せざるを得なかった。

(3) マンハイムの「文化社会学」は畢竟一種の総合社会学、あるいは歴史哲学風なものにならざるを得ないと思われるが、実際又彼の取扱っている一特殊社会学としての「知識社会学」論が実質的にはマルクスの唯物史観、特にそのイデオロギー論などに対する強い関心のもとに成立しているものであり(拙論「カール・マンハイムの知識社会学に関する若干の批判」富大経済論集、第二巻、第二号参照)、又「変革期における人間と社会」は個人主義的自由主義的な近代世界の超克を論じたものであって、これらは彼が如何に強い歴史哲学的関心をもっているかを示すものであらう。

(4) マンハイムが「文化社会学」を「文化やその発展の社会的性格と文化の特殊的諸領域の生成の全体的連関に関する理論」と規定しているように、我々の「文化社会学」も社会的行為と社会関係と社会集団という視点に基づいて社会的現実の歴史的発展や変動の問題に関係せざるを得ないのであるが、しかしそうした史観や社会変動論において今日特に必要と思われることは、昨今の内外における幾つかの優れた業績が示しているように、社会的現実を構成する諸要素が夫々相互に如何なる関係にあり、又それが時代的地域的に如何なる特殊性をもつかを何処までも実証的具体的に分析していくことであって、決して一挙にある命題を結論として打ち出すことではないと思う。勿論そうした結論的命題を研究操作上の仮設として立てることは必要であり、又今日みられる幾つかのそうした仮設のうちには極めて高い発見的価値をもっているものもあるわけであるが、しかしと

にかく夫々の社会科学が夫々に固有の問題点から現実を構成する諸要素間の関係に対する正確詳細な実証的分析の成果を供出し合つて始めて実のり豊かな総合も生れるのであって、マンハイム流の「総合」の立場はこうした手続を決して充分考慮しているとはいえないと思う。

(5) マンハイムは「一般社会学」と「特殊社会学」と「文化社会学」という社会学の三つの部門の外に、なお研究技術上の理由から(a)「社会誌」や「統計学」と(b)「現代学」という二つの特殊的領域を挙げているのであるが、しかしこのうち「社会誌」と「統計学」は、マンハイムもある箇所ですべているように、明らかに社会学的研究に際して留意さるべき記述や観察や計量の従うべき方法や資料なのであって、社会学の対象や研究領域として挙げらるべきものではない。又次の「現代人の生活の方向決定という要求」に応ずるといわれる、社会学の「現代学」は、その内容において、マンハイムの「文化社会学」と略々同一のものに帰着するわけであるから、そうした立場における「現代学」が本質的には、その「文化社会学」とともに、社会学に属し得ないことは既に十分明らかであらう。生活の方向決定とか、自我の方向決定の問題については社会学が発言する場合、それは厳密には何処までも社会学の発言に止まるのであり、従つて原理的には、本文に述べたような、我々の意味する形での「文化社会学」に基づいてなされるのでなければならぬと思う。

なおマンハイムの社会学観は、彼のアメリカ社会学観や更には彼のドイツ社会学とアメリカ社会学との相異に関する見解などとも対照すれば、一層明確になるわけであるが、しかしこの後者の問題については大道安次郎著「アメリカ社会学の潮流」一八〇—一八六頁に紹介があるので参照してもらいたいと思う。

以 上